

## 1 尊敬語

「…なさる・お…になる」

話し手（筆者や発言者）から、話題の中の**動作の主語**への敬意を表す表現が**尊敬語**である。（為手尊敬ともいう）

### 地の文（会話以外の描写部分）

①（惟喬親王は）その宮へなむおはしましける。

「おはします」は「行く」の尊敬語で、ここでは地の文に用いられている。したがって、筆者から、話題の中の「おはします」という**動作の主語**惟喬親王への敬意を表している。



（伊勢物語・八二段）

### 会話文

②使ふ者ども、「かぐや姫は）なほもの**おぼす**ことあるべし。」とささやけど、

「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で、ここでは会話文に用いられている。したがって、**発言者**使ふ者どもから、話題の中の「おぼす」という**動作の主語**かぐや姫への敬意を表している。



（竹取物語・かぐや姫の昇天）

## 2 謙譲語

「…申し上げる・お…する」

話し手（筆者や発言者）から、話題の中の**動作の受け手**への敬意を表す表現が**謙譲語**である。（受け手尊敬ともいう）

### 地の文

③（中将が帝に）薬の壺に（かぐや姫からの）御文添へ、**参らす**。

「参らす」は「与ふ」の謙譲語で、ここでは地の文に用いられている。したがって、**筆者**から、話題の中の「参らす」という**動作の受け手**帝への敬意を表している。



（竹取物語・ふじの山）

\*この場合、「参らす」という動作の主語は中将であるが、中将からの敬意ではない。「参らす」という敬語を用いているのは筆者であり、中将は行動しているだけだからである。

### 会話文

④（尼君は少女に）「…罪得ることぞと常に**聞こゆる**を、心憂く」とて、（源氏物語・若紫）

「聞こゆる」は「言ふ」の謙譲語で、ここでは会話文に用いられている。したがって、**発言者**尼君から、話題の中の「聞こゆる」という**動作の受け手**少女（若紫の君）への敬意を表している。



（源氏物語・若紫）

## 活用 Q & A

古文にはなぜ敬語がたくさん使われているのですか？

A 登場人物の名前や動作の主語を一つ一つ明示しないことが多いからです。一般に、日本語では「私」や「あなた」のような代名詞も含めて、動作の主語や相手を使いにくいすべて言うわけではありません。だから、敬語の有無や、違う種類の敬語を使うことで、その動作は「誰が・誰に（を）」しているのかを誤解なく理解できるようにするのが、

① 惟高の親王は）その離宮にいらつしやうた。

② 使用人たちは、「かぐや姫は）やはりあれこれとお思ひになることがあるに違いない」とささやへが、

### 注意 尊敬語の訳し方

(1) 「おっしゃる」など、本動詞がある場合はそれを用いる。  
(2) 「聞く」など、本動詞がない場合は「聞きなされる」「お聞きになる」などと訳す。

### 補足 「謙譲」とはむづいづいかな

「謙遜」と意味が近い。あなたが職員室へ入る時に、出ようとされる先生と鉢合わせしたとする。「どうぞ」と先生に道を譲るのは、あなたの謙遜の心から発するものである。

聞く↓うけたまわる  
言う↓申し上げる

上よりも、下の方が相手を敬う言い方である。それは、こちらを低めた結果である。

③（中将が帝に）薬の壺に（かぐや姫からの）お手紙を添えて**差し上げる**。

④（尼君は少女に）「…罪を受けること）になります（よ）いつも**申し上げているのに、困ったこと**」と云うて、

### 注意 謙譲語の訳し方

(1) 「申し上げる」など、本動詞がある場合はそれを用いる。  
(2) 「呼ぶ」など、本動詞がない場合は「呼び申し上げる」「お呼びする」などと訳す。